

The Garden of Adonis に 関する一考察

—Adonis 祭祀の遠い記憶とのかかわりについて—

小田原 謠 子

The Faerie Queene を書くにあたって Spenser が用いた方法は、C. S. Lewis の表現を借りるならば、「アレゴリーの核を各々の巻に置き、まわりをタイプのロマンスと呼ばれるもので囲み、純粹に架空の逸話をちりばめる¹」というものである。第三巻に於けるアレゴリーの核は、Canto VI の Garden of Adonis と名付けられた豊饒の園であるが、この Garden of Adonis という名称は、Spenser の発案ではない。すでに紀元前 700年に最古の記録を持つという Adonis 信仰の祭式の一部として存在したものであった。自然祭祀の一つである Adonis 祭祀に於て「はかない一時の美わしさと、すみやかな荒廢の象徴²」とされていた Garden of Adonis と同じ名称を持つ Spenser の Garden of Adonis は、生の豊饒が印象的な園であるが、これは、Adonis 祭祀の遠い記憶とどのような関係にあるものなのか。この園の描写にあらわれている豊饒、輪廻、再生の観念、無常の観念と、Adonis 祭祀の記憶とのかかわりあいをさぐってみたい。

< I >

Adonis という名から我々が連想するものは、まず第一に、ギリシア神話の Adonis の物語、すなわち、Aphrodite に愛された美青年 Adonisは、狩の最中、野性の猪に刺されて死ぬが、女神が彼の死を歎いて Zeus に祈り、一年のうち一定の期間、彼を地上に戻してくれるように頼んだ結果、

Adonis は、一年を Aphrodite と黄泉の国の女王 Proserpina の二人のもとですごすことになるという有名な物語であろう。しかし、Adonis 信仰は、ギリシア神話以前にその起源を持っている。これは、冬のあいだの植物の死滅と、春の繁茂、秋の実りが、生活と密接なつながりを持っていた農耕民族の中から生れた、植物神の死とその復活を通して豊饒を祈る自然祭祀の一つであり、フェニキアに始まったもので、ピブロス、アバカが、その中心地であったが、キュプロスへ伝わり、そこからギリシア本島へ伝わった。最古の記録は紀元前700年ということであるが、これ以前に祭祀の行われた可能性もあり、Langdon によれば、紀元前3000年にさかのぼるバビロンの Tammuz 祭祀と同じくらい古代に、Adonis という名とは別の名で存在した可能性もあるという³。

紀元前3000年頃、すでに、自然がその存在とエネルギーとをある人物の生命と生産力に負っていて、しかもその人物は、普通の人間のように衰えや死を避けられないとする観念が存在したというが⁴、Adonis が担ったのは、まさにこの人物の役割であろう。さきに紹介した Adonis の神話を大まかに解釈すれば、地上的な存在であった Adonis は女神の恋人として神の世界に受け入れられはしたが、完全に神となることは出来ず、その地上的性質を保っているため、死を免れることはなく、黄泉の国に行かなければならない。彼が黄泉の国ですごす期間が地上の植物の衰え、死ぬ冬であり、彼が女神のもとですごす期間が、植物の誕生と実りの季節であるということになるだろう。Adonis の物語の持つ意味、Adonis の死を悲しみ復活を祝い行事、祝いの日どりなど、さまざまな要因を考えあわせれば、Adonis という存在が、単に女神の恋人であるだけでなく、彼の生命と安寧とが、植物も動物も含めての自然の運行と密接な関係を持つ存在であることがわかる⁵。それは、Adonis という言葉がシリア語で〈主 Lord〉を意味することにも示されている。彼は、生命の主であり、また、Eniautos Daimon⁶ 即ち一年の運行を司る時の神の側面をも持つ。

具体的な祭祀の日どりは、国によって異っており、ギリシアでは、植物の誕生する春、パレスティナでは、植物の繁茂する6月、キュプロスでは、

神の復活が Syro-Macedonian カレンダーで新年の第一日目にあたるように、9月23日に行われた。儀式の順序もさまざまであるが、概説すれば、死んだ神に対する歎きの儀式を行い、続いて神の模像を海に流し、後に神の復活を喜ぶというものである。しかしアレキサンドリアでは、まず Adonis と Aphrodite の結婚を荘重に祝い、そのしめくりに、パピルス製の神の頭部を歎きつつ海に流し、ビブロスに7日以内に流れつけば、それを復活のしるしとして喜び迎えたという。⁷

ときには、死んでいくことが最も注意を引くことがある。Harrison の説に従えば、このことは、Adonis 祭祀に於ては、きわめて明瞭なことであった。エンファシスは、植物の誕生よりもむしろ、その衰乏と死に置かれた。この祭祀は再生を願う儀式であり、事実、再び蘇えるのではあるが、復活の儀式というより、むしろ死の祭祀⁸であり、根本的に悲歎の祭祀なのであった。⁹ 女たちは、Adonis のために髪を切り、一晩中ひどく泣き悲しんだ。このため、女たちの祭祀として有名であったこの祭は、10世紀には、アラビア語で El-Bûgat すなわち「泣く女たちの祭」¹⁰ と名付けられることになった。この普遍的な悲歎の真の理由は、植物の命が直接にかかわり、人間の命が間接にかかわっている神の生産力が、負傷や死によって妨げられていることにあると見る事が出来るだろう。人間の生命への希求が原始宗教に与えた影響力を我々は見なければならぬ。¹¹

Garden of Adonis とは、この悲歎の祭祀に於ける一儀式であり、女たちは、土を充たしたバスケットまたは壺に、小麦、茴香、蒿草等、さまざまな種類の花を植え、種を蒔き、水をやって8日の間世話をした。人々は、このバスケットまたは壺を Garden of Adonis と呼んだ。暑い国では、種子は芽を出すことが早い。しかし、これらの植物は、根がないためにたちまち枯れ、また種子は、早く芽を出し、成長するが、すぐにしぼむ。8日の終りに、これらは、死せる Adonis の神像と共に運び出され、海または泉に投げこまれるのであった。かくして、Garden of Adonis は、はかない一時の美わしさと、すみやかな荒廃の表徴¹²となり、Plutarchus によって、次のように言及されたのである。

いかなる費えであろうか…いかに空しい費えであろう，もし人に不死の魂が入っていないのであったら神の人間を作ることは。神はさながら陶器の壺や鉢の中のアドーンスの庭にさも似た愛すべき小さな庭を作り育てる女たちに似るでもあろう。ちょうどそのようにわれわれの魂もかよわく柔らかな肉体に芽ばえ出て，堅固な生命の根のないままに，ただ一日花を開いて栄え，たちまち，萎んで消えるであろう。¹³

＜Ⅱ＞

Spenser が描写した Garden of Adonis がいかなるものかと言えば，そこは，Venus (=Aphrodite) の地上での住居であり，Nature が造り出し得るかぎりの美しい園であり，他のあらゆる楽園をしのぐ喜ばしい楽園 (joyous Paradise) である(29)。そこには Nature がわが身を飾り，恋人の花環を作るためのあらゆる花があり，その性質に応じて，生れ，死んでいくあらゆるものの最初の苗床がある(30)。古くからの肥沃な土壤 (fruitful soyle of old) にあり，鉄製と黄金製の二つの壁に囲まれ，新しく美しい門と古い門の二つの門を，二つの性格を持つ Genius が番をしている(31)。Genius は，この世に生れ出たいと願う者たちを送り出す役目をしており，昼も夜も，何千もの赤ん坊が彼にまつわりつき，肉の衣 (fleshly weeds) を着せてくれとせがんでいる。運命の定めたとおりに，彼が，罪深い衣 (sinful mire) を着せて，やがては死すべき境遇へと (mortal state) 彼らを送り出すと，彼らはやがて裏の門から戻ってくる(32)。戻ってきた彼らは再び園に植えられ，あたかも肉の墮落 (fleshly corruption) や，死すべき身の痛み (mortal pain) など経験したことがないかのように，そこで新たに育ち，何千年かそこにとどまった後，Genius の手で他の姿を与えられ，再び，変化多いこの世 (the changeful world) に送り出されるが，また戻ってくる。このように，古いものから新しいものへと車輪のようにぐるぐると回るのである(33)。

そこは庭師の要らない園である。というのは，「産めよ，ふえよ」とい

う神の言葉をおぼえているために、植物は自から成育し、永遠の湿気を内に持っているために、水さえ必要としない(34)。あらゆる形の生き物がお(35)、日毎に世界に送り出されるが、巨大な混沌から補充されるため、少しも減らない(36)。この園の最大の敵は Time であり、Time さえいなければ永遠の至福があったろう。ここにはあらゆる生き物の、恨みや嫉妬を知らない、愛の成就の姿があり(39)、花は咲き木々は実る、不断の春と不断の収穫の時が同時に存在する(42)。この園の中央にそびえる山の頂上にテンニンカの繁みがあり、樹脂が甘い香をあたりにまき散らしている(43)。その最奥に、人工によってではなく、木々が本来持っている性向によって自から出来た気持のよいあずまやがある(44)。あらゆる花々の咲きみだれているそのあずまやに(45)、Venus が Adonis を世界からも黄泉の神々からも隠している(46)。彼を刺した猪も今は女神によって山の岩穴に閉じこめられ、恐れるものは何もない中で、Adonis は、永遠の至福に生き、女神と一体になる(48)。

上に紹介した Garden of Adonis に於ける Adonis がどのような存在であるかは、彼が Art (人工)ではなく Nature の手になる園、また、自然の運行の中で最も喜ばしい季節である春と秋、すなわち、植物の誕生の季節と、実りと収穫の季節とが存在するこの園に住むということにも暗示的に示されているわけだが、次に引用するスタンザを見ることで、より明らかになるであろう。

All be he subject to mortalitie,
 Yet is eterne in mutabilitie,
 And by succession made perpetuall,
 Transformed oft, and chaunged diverslie:
 For him the Father of all formes they call;
 Therefore needs mote he live, that living gives to all.

(III, vi, 47)

彼が死ななければならない存在ではあっても (subject to mortalitie), 無常の中に永遠の存在 (eterne in mutabilitie) であること、彼が、あらゆる形あるものの父 (the Father of all formes) と呼ばれている

こと、また、あらゆるものに生命を与える (that living gives to all) という表現などを考えあわせれば、Adonis が、単に Aphrodite の恋人であるだけでなく、植物神として、否、生命の父として、単に植物のみならず、植物、動物、及び人間の生命と生産性との密接なかかわりを持っていた頃の遠い記憶を伝えていることがわかると言えよう。

< III >

ところで、Garden of Adonis の描写から我々が受ける印象は、豊饒であり、また、生と死の交代の場所という園の設定に、無常及び輪廻、再生の観念が織りこまれているということであろう。これらについては、詳しく述べる必要があるわけだが、まず豊饒に関して言うならば、古くからの豊かな土壌、実りの季節、愛の成就など、至るところに豊饒を示す記述のあるこの園は、Adonis と切り離せない Aphrodite の地上での住居であるが、この Aphrodite が、愛、美、豊饒の女神であることがあげられる。Garden of Adonis が *The Faerie Queene* 第三巻のストーリーの展開上、Amoretta の生育の場として、Aphrodite の属性である愛と美とを備えていることは当然として、彼女のもう一つの属性である豊饒がこの園の特徴となっていることは注目に値する。一般に Artemis の純潔の原理とは対照的に、Aphrodite は愛欲の原理と考えられており、処女神 Artemis は狩猟の女神として不毛の原野で活躍し、愛の神 Aphrodite は、河畔の豊かな大地を好むとされ、純潔は不毛とつながり、愛欲はすなわち豊饒とつながる¹⁴ ことが示されている。Aphrodite は「充実そのものであり、過剰な黄金であり、絶えず与えながらそのことによって少しも貧しくならない奢侈の世界であり、また何ものにもよらず、自らで至幸な愛すべきものであって、仕合わせな者をいつでも進んで迎え入れる。」¹⁵ Aphrodite とは、いわば Plato の heavenly Aphrodite と、愛欲の女神 common Aphrodite のイメージと、Lucretius の言う、この生物界に於ける生殖と多産の女神とを総合した存在なのである。¹⁶

テンニンカ¹⁷ のあずまやでの Aphrodite と Adonis の幸せなる結合が

何を象徴するものであるかについては、批評家たちが頭を悩ましてきたわけだが、これは、Adonis の、自然祭祀に於ける豊饒神としての特性と、Aphrodite の持つ豊饒の女神としての特性とが相まって、自然に於ける生の豊饒、すなわち、自然のレベルでの、人と動物と植物との生の豊饒の象徴となっているのではあるまいか。

生の豊饒に関するものとして Spenser が登場させているいま一人の人物が Genius である。C. S. Lewis の説明によれば、Genius には、生殖を司どる普遍的な神 (the universal god of generation) としての Genius と、個人を守る霊、いわば、Socrates の言うダイモンと兄弟分的存在の Genius の、二種類の Genius がいるわけだが、Garden of Adonis に於ける Genius は、生殖を司どる神の方である。¹⁸この Genius は、次に述べる、生と死の交代の場所としての Garden of Adonis と関係してくる。

<IV>

生と死の交代の場所としての Garden of Adonis を見よう。

A thousand thousand naked babes attend
 About him day and night, which doe require,
 That he with fleshly weedes would them attire:
 Such as him list, such as eternal fate
 Ordained hath, he clothes with sinfull mire,
 And sendeth forth to live in mortal state,
 Till they againe returne backe by the hinder gate.

After that they againe returned beene,
 They in that Gardin planted be againe;
 And grow afresh, as they had never seene
 Fleshly corruption, nor mortal paine.
 Some thousand yeares so doen they there remaine;
 And then of him are clad with other hew,
 Or sent into the chaungeful world againe,
 Till thither they returne, where first they grew:

So like a wheel around they runne from old to new.

(III, vi, 32-33)

裸の赤子とは、肉体を持たない、前世の状態にある魂のことであり、何千もの裸の赤子が *Genius* により肉の衣を着せられて、園からこの世へと送り出され、やがては園へ戻り、何千年かを園ですごした後、再び形を与えられてこの世へと送り出され、また戻り、古いものから新しいものへと車輪のように云々という描写から連想されるものは、魂の不滅であり、輪廻転生の概念であろう。上に引用したスタンザに具体的にあらわされたこの概念が、次のスタンザには、より抽象的にあらわされている。

All things from thence doe their first being fetch,

And borrow matter, where of they are made,

Which when as forme and feature it does ketch,

Becomes a bodie, and doth then inuade

The state of life, out of the griesly shade.

That substance is eterne, and bideth so,

Ne when the life decays, and forme does fade,

Doth it consume, and into nothing go,

But chaunged is, and often altdred to and fro.

(III, vi, 37)

靈魂の不滅を最初に説いたのはエジプト人であると言われている。彼らは、肉体が減びた後、魂は、次々に様々な動物の体内に入り、3000年の後に、再び人間の肉体に戻ると信じていたという。この観念がギリシヤ思想に流入したわけで、輪廻説に関してよくひきあいに出されるのが、*Pythagoras* であり、また *Plato* である。*Pythagoras* の説いた、万物流転、輪廻転生の思想の一部を紹介しよう。

この宇宙の中には、ひとつとして固定しているものはない。すべては流れうごき、あらゆる現象は、つぎつぎにその形姿をかえていく。

万物をたえず更新する自然は、ひとつの形から、さらに新しい形をつくりだす。まことにこの世界じゅうに、滅び去るものは、

なにひとつないのだ。すべては流転し、その姿をかえるだけである。

靈魂は、けっして死ぬことがない。それは、もと住んでいた場所を去ると、つねに新しい住家をもとめ、そこに住みついて生きつつける……

生命の息ぶきは転々とめぐり、甲から乙へ、乙から丙へ移りゆき、つぎつぎに肉体に宿をもとめる。動物の体から、人間の身体へ移ることもあれば、人間の身体から動物の体に居をかえることもある。しかも、けっして死ぬことはないのだ……靈魂もまた、つねに同じものであって、ただ、さまざまな姿に移り住むにすぎないのだ。¹⁹

人間の魂と肉体とを区別するのは、すでに Homer にも見られる古い思想であるが、紀元前5世紀後半には、魂を天と、また、肉体を大地と関係させる思想があらわれる。魂を天と結びつけて、肉体や大地よりも尊いとし、肉体をさして窓なき牢獄と呼ぶ思想は、主として Orpheus 教のものであるらしい。²⁰

Plato の思想には、Orpheus 教や Pythagoras 学派に共通する思想が織りこまれていると言われる。事実 Plato は、輪廻に関しては Pythagoras 派の考え方をかなり買っており、魂の不滅について、何箇所かで述べているが、それは、人間の魂が、どうしようもなく肉体という牢獄に縛りつけられ、膠着させられているかぎり、すなわち、人間が肉体を持ち、人間の魂が、肉体的な悪と離れがたく結ばれているかぎり、決して、真実を充分には獲得しえないとする認識と、無関係ではあり得ないと言えよう。ここでは、Plato の魂の不滅に関する議論の中から、Er の物語として知られているものを紹介しよう。『国家』で語られる Er の物語は、『ハイドン』で展開された魂の不死の証明を補足するものであり、戦争で最期を遂げた Er が生き返り、死後の世界を語るものである。

[Er] の魂は、身体を離れてから、他の多くの魂とともに道を

進んでいって、やがて、ある靈妙不可思議な場所にいたった。そこは、大地に二つの穴が相並んで口をあけ、上のほうにも、これと向いあって、天に別の二つの穴があいていた。

これらの天の穴と地の穴とのあいだに、裁判官たちが坐っていた。彼らは、そこへやって来る者をつぎつぎと裁いて判決を下した……

そこで〔Er〕は…魂たちが判決を受けてから、天の穴と地の穴のそれぞれ一つの口から、そこを立ち去っていくのを見た……

それぞれの〔魂〕は……1000年続いたその旅路において……すべての罪業のために順次罰を受けたのであるが……人間の一生を100年と見なしたうえで、その100年にわたる罰の執行を10度くりかえすわけである……

…〔魂たち〕は、受けねばならぬ苦しみをすべて受けてしまってから、地の穴から上に脱け出ようとして、出口の近くまでやって来た……出口は、罪を癒しえないほどに極悪な者や、まだじゅうぶんに罰を受け終えていない者が上に出ようとする、そのたびに咆哮の声をあげ…すると…猛々しい男たちが……その咆哮の声の意味を了解し、彼らを両側から驚つかみにして連れ去った。

かくて裁きと刑罰は、以上のごときものであり、恩恵のほうもまた、これらに相応するものである……

……

さて、牧場に集った魂たちのそれぞれの群は、7日間をすごすと、8日目に……旅に出なければならなかった……彼らはある一つの地点に到着したが……はるか天空から光の綱の両端が延びてきているのを見た……この光は……回転する天球の全体を締めくくっていた……

その端からは、アナンケ（必然）の女神の紡錘が延び……それによってすべての天球が回転するようになっていた。

……

…アナンケの女神の……ほかに三人の女神が…王座に腰をおろしていた。すなわちアナンケの女神の娘，モイラたちであって…その名はラケシス，クロト，アトロポス。

……

…魂たちは，そこに到着すると，ただちにラケシスのところへ行くよう命じられた。そこには神の意を伝える役の神官が一人いて……つぎのように言った――

『これは，女神アナンケの姫御子，乙女神ラケシスの御ことばであるぞ。

命はかなき魂たちよ，ここに，死すべき族のたどり，死に終るべき，いまひとたびの周期がはじまる。

運命を導く神霊が，汝らを籤引き当てるのではない。汝ら自身が，みずからの神霊を選ぶべきである。

第一番目の籤が当たった者をして，第一番目に一つの生涯を選ばしめよ。選んだその生涯に，以後，彼は，必然の力によって縛りつけられ，離れることができぬであろう。

責めは，選ぶ者にある。神には，いかなる責めもないのだ。』

……

…すべての魂たちが生涯を選びおえると……ラケシスは……さきにそれぞれが選んだ神霊をそれぞれの者につけてやった。

……

…魂たちは<放念の河>のほとりに宿営することになった……すべての魂たちは，この水をきめられた量だけ飲まなければならなかったが…飲んだとたんに，いっさいのことを忘れてしまった。

みなが眠りについて，やがて真夜中になると，雷鳴がとどろき，大地がゆらいだ……と，その場から突如としてそれぞれの者は，あたかも流星が飛んでいくように，かなたこなたへと新たな誕生のために，上方高く運びさられていった。²¹

以上が、Er の神話である。いささかまわり道をしたが、さて、ふりかえって Spenser の Garden of Adonis を見れば、Plato の述べた魂の世界を、比較的忠実に再現したと思われる Virgil とは異り²²、Garden of Adonis の魂たちには、生前の罪をつぐなう報いであるとか、浄化の呵責といったものはない。あたかも自分たちが、肉の墮落 (fleshly corruption) を経験したことがなく、死すべき者の痛み (mortal pain) を知らなかったかのように、死後、再び園に植えられ、1000年の後、またこの世に出されるのである。実に機械的である。Hough の指摘にもあるように、たとえば Spenser が、Lucretius のイメージを借りているからといって、彼が Lucretius の思想に固執しているとするのは誤りであるだろうし、また彼が Plato のイメージを借りているからといって、彼を、オーソドックスな neo-platonist と見なすのは、誤りであろう。Spenser は、単に、当時の常識をここに使っているだけと見なすことが出来るだろう²³。我々は、Spenser の借りてきた思想なりイメージなりが、全体として何をあらわすかを見る必要がある。おそらく彼は、先人の思想の細部はほとんど切り捨て、靈魂の不滅と輪廻の思想、すなわち、肉体の生—死—再生のサイクルをあらわすことのみを念頭に置いていたのではなかろうか。

生—死—再生のサイクル、これこそが Garden of Adonis にあらわされたものであろう。この園にあるものは、まぎれもなく生の豊饒である。しかし、それは、永遠の豊饒なのではない。あくまでも「自然」の豊饒なのである。自然とは、すなわち、時の支配を逃れられない、この世の次元に於ける運行のサイクル、言いかえれば生と死、の存在する世界なのである。「不断の春、不断の収穫の時」があるとは言いながら、Time が、情容赦なく大鎌をふるって、花のつぼみを打ち落とすのであり、時の支配を免れることは出来ず、この園は、絵そらごとの永遠の至福の園、パラダイスではなく、無常 (mutability) の支配下にある現象界にすぎない。この点で、第三巻の Garden of Adonis は、無常篇 (the Mutability Cantos) へとつながっていく。

< V >

The Mutability Cantos に於て、自分が万物を支配しているという Mutability の申し立てに対する、母なる Nature の判決は、「万物は固定を嫌い、変化するものではあるが、それらは最後には再び元の自分にかえって、変化によって自らの完成を成し遂げるのであるから、万物が Change に支配されるのではなく、万物が Change を支配しているのだ」として、Mutability の申し立てを却下することであった。しかし詩人は、それに続くスタンザで、Mutability が、なるほど天国をこそ支配はしないが、その他のすべてを支配することを思い、その事実のゆえに、花のさかりがすぐに色あせる、うつろいやすいこの世がいとわしい、と歎くのである。

In all things else she bears the greatest sway,
Which makes me loath this state of life so tickle,
And love of things so vaine to cast away;
Whose flowering pride, so fading and so fickle,
Short Time shall soon cut down with his consuming sickle.

(viii-1)

The Mutability Cantos は、その名の示すとおり、その大部分が、Mutability の、自分があらゆる場を支配しているという主張であって、Nature が、彼女の訴えを退け、その判断の根拠を示しているのは、わずかに1スタンザにすぎない。全体の印象は、最後の2スタンザでの、この世の無常を思う詩人の歎き、いささか、絶望的色彩をおびた詩人の歎きに収約されると言っても言いすぎではあるまい。この the Mutability Cantos のテーマは、一見したところ、I～VIのロマンスの世界と相容れないように見えるが、そうではなく、しばしば、作品中にあらわれてきたものであり、絵そらごとのロマンスの底に、無常の意識が流れていると言える²⁴。

この世に、永遠に固定したものは存在せず、ただ、無常であるという意識。エンファシスをどこに置くかということになるだろうか。個そのものはうつりかわるが、その実体は、個々のもののうつりかわりの中に伝えら

れるという側面、また、個は、生—死—再生のサイクルの中にあるものではあっても、サイクルそれ自体が永遠であり、不変であるという側面にエンファシスを置くか、あるいは、実体は個々のものの姿の中に伝えられはしても、個々のものそのものは、死に、滅びるという側面にエンファシスを置くか、である。Spenser は、本質は変化せず、外的変化は、ただ本質の完成を目ざすのみ、として価値観を加え、前者をとっているようである。この世が、神の永遠の摂理の中に組みこまれているとするキリスト教倫理観が入っているのであろう。しかし、描いた Spenser の意図がどうであったにせよ、かつて、Aphrodite が Adonis の死を歎いたように、個々のものの死、衰微の歎きが、Garden of Adonis には見られる。

かつて「はかない一時の美わしさと、すみやかな荒廃」の象徴とされた、Adonis 祭祀に於ける Garden of Adonis とは、あるいは、人の世の、個のレベルでの生を象徴するものではなかったろうか。個のレベルでの人間が、どうしようもなく肉の存在であること、肉の世界に生れ、老い、死んでいくこと、個のレベルでの人の生が、Garden of Adonis のごとく、はかない一時の美わしさと、すみやかな荒廃を持つものであることを思えばこそ、人は、魂の不滅、不滅の魂による個の再生を願ってきた。そして、誰が生き、誰が死ぬなどということに関係なく進行していく大きなサイクル、すなわち、誕生、生、死、そして再生、という終りなき永遠の輪廻の中に、この世のあらゆる存在が織り込まれることを思ってきたのではなかろうか。

誕生から死、そして再生、という輪廻は、おそらく、いかなる種類の宗教にも、その中心的な観念として存在しているだろう。Adonis 祭祀は、悲歎の祭祀ではあっても、その底には、生の肯定があった。生を待ち望むが故に人々は死を歎いた。そこには、おそらく、土俗の、どろどろしたものがあつたらう。Spenser の Garden of Adonis は、Adonis 祭祀の遠い記憶を伝えるものでありながら、そこには生の、どろどろした土俗的な要素はないように思われる。個のレベルでの豊饒をうたい、個のレベルでの衰微を歎いてはおりながら、個のレベルを超えた、サイクルとい

う永遠の相をうつし出していると言えるのではなからうか。

〈注〉

1. C. S. Lewis, *The Allegory of Love* (1936), London, Oxford University Press, 1973, p. 334. 訳は筆者による。
2. J. E. Harrison, 『古代芸術と祭式』(1913) 佐々木理訳, 東京, 筑摩書房, 1973.
3. Jessie L. Weston, *From Ritual to Romance*, (1920), New York, Doubleday and Company, 1957, p. 42. Tammuz 祭祀と Adonis 祭祀には, 類似点が多いがここではふれない。
4. *Ibid.*, p. 47. また, その実例に関する民族学的研究は, Cf. James G. Frazer, 『金枝篇』(1890) 永橋卓介訳, 東京, 岩波書店, 1969.
5. Weston の指摘による。
6. Weston, *op. cit.*, p. 46.
7. *Ibid.*, pp. 46-47.
8. Harrison, *op. cit.*, p. 12.
9. *Ibid.*, p. 47.
10. Weston, *op. cit.*, p. 47.
11. *Ibid.*, p. 44.
12. Harrison, *op. cit.*, pp. 43-44.
13. *Ibid.*, p. 44.
14. Aphrodite と Artemis に関して, 詳しくは, 藤縄謙三『ギリシア神話の世界観』, 東京, 新潮社, 1973, pp. 176-178. 藤縄氏の指摘によれば, 「Artemis は, 古い宗教を保存していた僻地アルカディアなどでは, 樹木崇拜と結びついていたようである。そして世界各地に見られる樹木崇拜がそうであるように, ここでも樹木崇拜は, 豊饒の秘儀という性格を帯びていたから Artemis は豊饒の女神という性格があった。しかしこれはあくまで古い土俗的な要素であって, ふつうは Artemis は徹底的に処女神である。」
15. Walter F. Otto, 『神話と宗教』(1956), 辻村誠二郎訳, 東京, 筑摩書房, 1972, p. 143.
16. Plato, *Symposium*, 180. Lucretius, *Of the Nature of Things*, p. 1.
17. テンニンカとは, ハト, バラなどと同様, Aphrodite のものとされている木であり, Aphrodite と Adonis の住居として言うまでもなくふさわしい。
18. C. S. Lewis, *op. cit.*, pp. 361-63.
19. オウィディウス, 『転身物語』, 田中秀央訳, 東京, 人文書院, 1973, pp. 533-37.
20. 藤縄謙三, 『ギリシア神話の世界観』, p. 94.

21. Cf. Plato, 『国家』, 第10巻。訳は、田中美知太郎編『プラトンⅡ』, 東京, 中央公論社, 1976, によった。
22. Virgil, *Aeneid* (ヴェルギリウス, 『アエネーイス』, 泉井久之助訳, 東京, 岩波書店, 1976) 第6巻には, 次のような箇所がある。

…… 故にこれらの生きものは, すべてかれらの生命の, 種子から見れば肉体の, わざわい受けて邪魔をされ, 地上的なるその四肢と, いずれは死すべき生身とに, 鈍らせられぬその限り, もともと火性の力を持ち, 天上的な起源持つ。肉体もつため生きものは, あるいは怖れまた欲し, 悲しみよろこび定めなく, 暗と窓なき牢獄に, 閉じこめられて上天の, 光を見わけることもない。どころか最後の時が来て, いのちが彼らの肉体を, 去ってもあわれ! 彼らには, あらゆる悪やありとある, 肉体的な業癖が, 残らず去るというでなく, 長きに亘って髓までも, 深く根を張る悪業は, 不思議につよく染み込んで, 抜き難いのはぜひもない。だからここでも霊どもは, 罪をつぐなう報いうけ, 地上でおかした悪業の, 罪を支払いその故に, 或る霊どもは, 身体も, なくして空しいなりのまま, 吊り下げられて吹く風の, ままに曝され, 他のものは, 渦巻く広い深淵に, さいなまれつつ身に染んだ, 罪を洗われ, 或るはまた, 猛火にやかれて罪を消す。われらは誰もみずからの, 霊の蒙るこのような, 浄化の罪責を忍ぶもの。忍んだのちにわれわれは, エーリュシウムの広大な, 場所を通じて送られて, ごく少数のものだけは, このわしのよう悦楽の, 野に住みついて時の輪が, めぐりを終える長い間に, われらの心に浸みついた, 汚れを去って感覚を, 神のごとくに純粹に, 浄めて心に清浄な, 天火を残してくれるまで, 長い時間をここに待ち, 遂に天に立ち帰る。しかしお前がここに見る, 霊たちはみな千年の, 時がめぐったその時に, 神に呼ばれて群れなして, レーテー河畔に集められ, すべてを忘れて天上の, 蒼穹再び見るを待ち, 再び肉体被ることを, 望み出すようさせられた, ものにもちろんちがない。

(VI, ll 727~753)

23. Graham Hough, *A Preface to the Faerie Queene*, London, Gerald Duckworth and Co. Ltd., 1962, p. 177.
24. もっとも, 晩年, 家が焼け, 息子が死に, といった状況で書かれた the *Mutability Cantos* が, 他の巻と少し趣きを異にしていることを, つけ加えておかなければならない。